広島県立広島西特別支援学校
教諭　　杉谷　千登世

自分を知ること，人とつながること
～重度・重複障害児の ICT を活用した授業の取組～

1　学校・学部の概要

本校は広島県の西端大竹市に位置し，隣接する独立行政法人国立病院機構広島西医療センターに入院又は入院見込の児童生徒が学ぶ特別支援学校（病弱）である。小学部，中学部，高等部が設置され，神経・筋疾患，脳性まひ等，心身症等の児童生徒 19 名が在籍し，準ずる教育，知的代替，自立活動中心の３つの教育課程を編成し，健康状態や病状に応じて，場所や時間，内容の調整をした学習を行っている。

小学部には１年～５年まで７名の児童が在籍する。いずれの児童も重度・重複障害を有し，生後間もなくもしくは幼児期から入院生活を継続して現在に至っており，極度な経験の不足がある。病棟内で学習していることや呼吸管理，体調への配慮から，様々に活動制限のある中，ベッドサイドで授業を行っている。児童の入院している病棟や病室はそれぞれ異なり，毎時間教員と１対１で学習を行い，友だちの存在を感じる機会が極めて少ない環境にある。

2　取組の概要

小学部では，児童が，大切な存在である自分のことを知り，伝えたい気持ちを育て，友だちや周囲の人とのつながりを深め，好きなことややりたいこと，そして夢や希望を見つけられるよう教育活動に取り組んでいる。病棟内で個別に学習したり，身体活動に制約があったりという環境の中で，ICT 機器の活用は大変有効であることを様々な場面で感じることができた。さらに良いものになるよう日々試行錯誤を続けている。

単元	内容	成果
生活単元学習「病棟探検をしよう」	写真やビデオ，ディーセルボイス（アプリ）を使用して，自分の日課や身の回りのスタッフの名前や仕事を学習し，双方向通信を使って発表しあった。	自分の生活や病棟の事を客観的に理解するきっかけとなった。「〇〇ちゃん，吸引してる？」「ご飯食べる？」など，友だちの生活のことに関心をもつようになった。
生活単元学習「カレンダーをつくろう」	双方向通信でお願いし，自分たちの作ったカレンダーを養護教諭に病棟に取りに来てもらい，保健室に飾った。	養護教諭が学校と病棟の間を移動する時間をワクワクして待つことができた。知っている教員が保健室でカレンダーを見ている様子を見て児童が喜びを感じた。
定期的な双方向通信	双方向通信を使い，日ごろの作品を紹介したり，歌や合奏，簡単なルールのあるゲームを行った。	友だちに会えることを楽しみにして待ち，画面の中の友だちの変化に気づくようになった。物の貸し借り，順番などの経験や理解につながった。機器の準備や片づけができるようになった。
特別活動「誕生会」「お楽しみ会」	同時中継や双方向通信で，児童全員の顔が見える環境を設定し，学部での集会活動を行い，誕生者のお祝いや，挨拶などの役割の分担，出し物の発表を行っている。	みんなにお祝いしてもらう喜びや，自分の発表や出番を待つ緊張感や達成感を感じることができた。友だちの頑張りをリアルタイムで見ることや，評価されることが，喜びや意欲につながっている。友だちの顔を正面から見ることができ，表情をとらえることができる。

3　課題

（１）児童の見え方，聞こえ方，認知の状況に応じた，機材設置と内容構成や進行の工夫が求められる。

（２）人（組織）や機器環境が，次の点で不十分である。

・通信環境が不安定で，音声や画像が途切れることがあり，児童が情報を受け取りにくい。

・学部集会活動時は，その都度スタジオを設営するため準備に時間がかかる。機器の接続が複雑である。

・機器のトラブルや設営に対応できる教員が少ない。

（３）経験の拡大を図る方向での利用も考える必要がある。